実践 3

実際の和本を利用した出前授業

加藤直志（名古屋大学教育学部附属中・高等学校）

1 はじめに

ここでは、二〇二二年三月に、名古屋大学教育学部附属中学校で三年生を対象に行った、和本バンクを利用した出前授業の実践報告を紹介したいと思います。

和本バンクとは、同志社大学古典教材開発研究センターが試行的に運用しているもので、有志から寄贈された明治時代以前の和本を、授業での使用を検討している小学校・中学校・高等学校・高等専門学校の教員へ無償で貸し出し、より多くの児童・生徒に、直接、和本を手に取ることのできる機会を提供しようという活動です。

新型コロナウイルスの影響で、和本のみを事前に郵送してもらい、外部講師の二人（加藤弓枝・三宅宏幸）はオンラインで参加するという形での実施となりました。

2 授業の展開

教科書に載っている古典は、ごく一部にすぎないということを生徒たちに理解してもらいたいと考え、物語や和歌などのいわゆる「古典文学」には限定されない、さまざまな分野の和本を用意しました。くずし字で書かれているものも多かったのですが、そうでないものもありました。

［表］各班に配布した和本

1 班	『竹取物語』	教科書所収の古典
2 班	『平家物語』	
3 班	『姿百人一首小倉錦』	和歌関係
4 班	『新古今和歌集』	
5 班	『仮名読八犬伝』	合巻（江戸の絵本）
6 班	『修紫田舎源氏』	
7 班	『植物小誌』	明治の教科書
8 班	『物理学初歩』	
9 班	『懐宝御江戸絵図』	地図・双六
10 班	『五拾三駅独案内』	

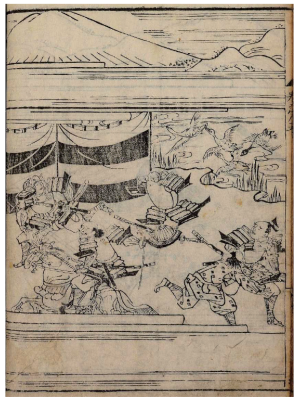
クラスを一〇個の班（各班三〜四名）に分け、一〇種類の和本を用意し、同一ジャンルの本を二つの班にそれぞれ一点ずつ配布しました（**表**参照）。あわせて、ワークシートとくずし字一覧表も配布しました。

導入（一〇分間）では、三宅が、授業のねらいを説明し、加藤弓枝が、和本を扱う際の注意事項（手を洗う、装飾品は外す、筆記用具は鉛筆、両手で丁寧に扱う、本は重ねない、水平で清潔な場所に置く、一枚ずつ丁寧にめくる）について説明しました。和本はくずし字で書かれているものが多いという点も確認しました。

展開①（一五分間）では、各班で相談しながら、自分たちの班が担当する和本について、観察・分析してもらいました。ワークシートに従い、五つの観点（文字・挿絵・書物の形（大きさ）・書物の重さ・紙）において、現代との共通点・相違点を見つけながら、何が書いてある本なのか最後にまとめてもらいました。生徒たちは、和本を手に取りながら、じっと黙って考え込んでいましたが、数分間の後、いろいろと相談する声が聞こえるようになりました。

展開②（一五分間）では、ワークシートに記入した内容をクラス全体に発表することで、他の班がどのような和本を扱っていたのかについて情報を共有しました。すべての班に発表してもらうだけの時間がなかったため、例えば、一班と二班のうちのどちらか、というように、各ジャンルから一班ずつ、合計五つの班を加藤直志が指名しました。各班の代表生徒による報告の後、外部講師が解説を加えるという形式を五回繰り返しながら授業を展開しました。

一・二班は、教科書でもおなじみの物語でした。『平家物語』には、富士川の戦いの場面の挿絵が含まれており、ちょうど、二〇二二年の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」でその場面が放送されたばかりだったこともあり、ドラマを見ている生徒は特に関心を持ったようでした。三・四班は、和歌関係でした。『新古今和歌集』はとても小さな本でしたが、その精密さに生徒たちは驚いていました。五・六班は、合巻（江戸時代の絵本）。



使用した和本の一例『平家物語』
（同志社大学古典教材開発研究センター蔵）



使用した和本の一例『偽紫田舎源氏』（多色刷）
（同志社大学古典教材開発研究センター蔵）

生徒たちは、多色刷りの鮮やかな色彩に魅了されていたようでした。七・八班は、明治時代の理科の教科書でした。理系分野について書かれた和本についても生徒たちに知ってほしいと考えて選定しましたが、生徒たちは「物理の内容が難しくてわからない」と困惑気味でした。九・一〇班は、地図や双六でした。いわゆる冊子体ではなく、現代の概念では「本」とは呼ばないものでしょうが、生徒たちは知っている地名に関心を寄せていました。

終結（一〇分間）では、まず、加藤弓枝が、和本の長所について解説しました。次に、三宅が、表紙をつなげると一枚の絵になるという合巻の特徴が現代のマンガ本にも受け継がれていることを指摘しました。『偽紫田舎源氏』を担当した六班の生徒が、この解説を聞きながら実際に表紙を並べて確認していたのが印象的です。さらに、三宅が、古くからあるものなのだが現代の我々にとっては未知の情報が多いこと、地震の研究なども含めると理系分野においても古典籍が注目されていること、教科書に載っているものは古典の一部にすぎないこと、世界の多くの国が自国の古典を大切にしていること、といった古典を学ぶ意義についてまとめました。

最後に、江戸後期の名古屋周辺の絵図をスライドで紹介し、昔の地図が災害予測に役立つ面もあることなどを指摘し、過去について知ることは現代にも関わることであり、未来にもつなげていくべきものであるということを三宅が力説しました。

授業後、生徒たちからは、「なにがかいてあるかはわからなかったけど、紙の手触りとか重さとか、さわらないとわからないことがわかってよかった」、「教科書では内容しか知ることができなかったが、実物を見ると、色付きの挿絵があったり、材料が和紙であるため軽いといったことを新たに知ることができてかたくるしい、といった観点から視野が広がった」などの感想が寄せられました。本実践を通して、内容の詳細がわからなかったとしても、手触りなどを通して、古い書物の価値や魅力を生徒たちに伝えることができたと考えています。

3　和本の可能性

従来の古典教育においては、書かれている内容を正確に読み取ることが重視されてきました。その重要性は今後も揺るがないでしょうが、一方で、内容がよくわからなくても、和本に実際にさわってみることで、古典の価値や魅力の一端を学習者に伝えることもできることを実感しました。また、本実践では、現在の国語科教育の枠組みでは、取り上げられることのないような分野の和本も紹介しました。このように和本には、国語科に限らず、さまざまな教科・分野で豊かな学びを提供してくれる可能性が秘められています。出前授業や和本バンクにより、学びの選択肢が拡がる可能性があります。近年は、学会や大学によるものだけではなく、各地の図書館、博物館、美術館などにおいても、司書や学芸員といった専門職員による各種の講座や出前授業が行われています。学習指導要領の総則には、小・中・高校すべてにおいて、地域の図書館や博物館，美術館，劇場，音楽堂等の施設の活用を積極的に図り，資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること。

（「小学校学習指導要領（平成29年告示）」二三頁、「中学校学習指導要領（平成29年告示）」二四頁、「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」二九頁、いずれも同一の文言）

とあり、「主体的・対話的で深い学び」を実現していく上で、外部機関との連携が推奨されています。学校現場に無理な負担をかけることなく、新しい学びの機会が提供されることが期待されます。和本バンクにおいても、各校が利用しやすいよう、改善を進めていきたいところです。

※本実践の詳細は、加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸「くずし字による古典教育の試み（7）―和本バンクによる出前授業―」（『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第六七集、二〇二二年一二月）をご参照ください。